

## 日本語における男性名と女性名の史的変遷 － 2 拍名を中心に－

小 川 俊 輔<sup>1</sup>・森 楓 花<sup>2</sup>

### The Historical Change of Masculine and Feminine Names in the Japanese Language: Focusing on the Two-syllable names

Shunsuke OGAWA and Fūka MORI

キーワード：名，拍数，母音，子音，流行

Keywords：first name， number of syllables， vowels， consonants， trend

#### 【要旨】

本論文では、2000・2001年（平成12・13年）生まれの人名（first name）について新たに調査をおこなってデータベースを作成し、1980年（昭和55年）頃生まれの人名について考察した田籠（2005）と比較し、次のことを明らかにした。①男性名では、1980年（昭和55年）頃生まれは4拍が最多、2000・2001年（平成12・13年）生まれは3拍が最多。つまり、最も一般的な男性名の拍数は変化した。②女性の2拍名は、1980年（昭和55年）頃生まれは21.4%、2000・2001年（平成12・13年）生まれは29.0%と増加した。③2拍名の2拍目の音（語末音）には男女差がある。男女とも1980年（昭和55年）頃比べ、2000・2001年（平成12・13年）の2拍名の語末音はその種類が増えた。しかし、その音がア・エである場合、両世代とも、それは女性名である。

また、インターネット上に公開されている2つの名前ランキングから、令和時代における命名の傾向を考察し、次のことを推定した。④1980年（昭和55年）頃以降、2拍の男性名がその人気を高め続けている。⑤1960年（昭和35年）以降の2拍の女性名の急激な増加傾向は、平成・令和の時代を通じて継続、あるいは高次安定している。

他方、2022年（令和4年）の名前ランキングには、2拍名の2拍目の音（語末音）がアである男性名が登場する。新傾向の名である。

1 県立広島大学地域創生学部地域創生学科地域文化コース教授

2 県立広島大学人間文化学部国際文化学科卒業生

## 1. はじめに ——先行研究, 本論文の目的, 方法, 構成——

### 1.1. 先行研究 ——人名 (first name) の日本語学的研究——

日本における人名 (first name) の量的方法による日本語学的研究は柴田 (1955) を嚆矢とする。この研究は、柴田も携わった「日本人の読み書き能力」の調査 (1948年 (昭和23年) 実施) の折に収集された人名データを対象とする。日本人全体 (15歳から64歳までの男女) からランダムに選ばれた21,008人の名を検討する (柴田1955: 126)。

この研究に触発され、寿岳 (1958)、寿岳・樺島 (1958) などの研究が相次ぎ、雑誌『言語生活』にもたびたび特集などのかたちで人名が取り上げられた。また、柴田はその後にも人名の研究を継続し、その成果は岩淵・柴田 (1964) などに結実した。しかし、その後、音声・語彙・文法等の一般の日本語学研究に比べれば人名研究は低調で、限られた研究者によって細々と、また散発的に続けられてきた状況にある。

### 1.2. 本論文の目的, 方法, 構成

以上のような研究状況下において、本研究は先行研究の方法にならって新たにデータを収集・整理し、その結果を先行研究と比較することで、日本語における男性名と女性名の歴史的変遷を明らかにする。具体的な考察の対象は、多くの先行研究が取り上げてきた名の拍数、特に2拍名の消長を本研究の中心課題とし、これに関わるいくつかの事象を取り上げる。

以上の目的に照らして、本論文では次の構成で論を展開する。まず、新たに収集・整理したデータ (以下、**森データ**と呼称) について紹介する (1.3)。これは2000・2001年 (平成12・13年) 生まれの名のデータである。このデータを用い、当時の名づけにおける男女差について検討する (2.1)。次に、森データの調査結果と、1980年 (昭和55年) 頃生まれの名のデータについて分析した田籠 (2005) とを比較することで、この20年間における名づけの異同を明らかにする (2.2, 2.3)。続いて、研究の蓄積が進んでいる2拍の女性名について、複数の先行研究の成果をひき、これに森データを加味して、江戸時代から2000・2001年 (平成12・13年) までの2拍の女性名の消長を明らかにする (3.)。そして、森データによって平成時代における2拍の男性名について検討し (4.1)、最後に、企業によって公開された2021年 (令和3年) から2023年 (令和5年) までの名前的人气ランキングを整理・検討することで、令和時代における男女の2拍名について分析する (4.2)。以上2.1~4.2の考察を通じて明らかになったことのうち、特に重要と思われるものを箇条書きで示し (5.1)、今後の検討課題について触れ (5.2)、まとめとする。

### 1.3. 新たに収集した2000・2001年生まれの人名のデータ (森データ) について

2000・2001年 (平成12・13年) 生まれの人名のデータは、本論文の第2著者である森が在籍した中学校・高等学校、および森が知人から集めた中学校・高等学校の卒業アルバムから収集した。中学校は2016年度 (平成28年度) 卒業生、高等学校および中高一貫校は2019年度 (平成31年度) 卒業生の卒業アルバムである。よって、森データに収録されたのは、概ね2000年 (平成12年) 4月から2001年 (平成13年) 3月までのあいだに生まれた人の名である<sup>(1)</sup>。これを「2000・2001年 (平成12・13年) 生まれの人名のデータ」と記載するのは、すべての先行研究が年度ではなく年単位で計算・分析しており、これにならったためである。表1は対象となった校名の一覧である。

表1：2000・2001年生まれの人名データ（森データ）の収集先

## ▼中学校：2016年度（平成28年度）卒業生

廿日市市立佐伯中学校，廿日市市立廿日市中学校，  
広島市立五日市中学校，広島市立牛田中学校，広島市立長東中学校

## ▼高等学校：2019年度（平成31年度）卒業生

広島県立祇園北高等学校，広島県立国泰寺高等学校，広島県立廿日市高等学校

## ▼中高一貫校：2019年度（平成31年度）卒業生

広島市立安佐北中学校・高等学校，安田女子中学校・高等学校

データを整理する段階で，中学校と高等学校の卒業アルバムに同一人物がいる場合，一方だけを採用した（→中学校のデータで採用した場合，高等学校のデータには採用しない）。また，卒業アルバムには名前の読みは表記されていないため，知人から集めた卒業アルバムについては読みかたを確認してもらった。正確な読みかたがわからないものについてはデータから除外した。

以上の方法で収集されたデータは延べ1,902，うち男性名817，女性名1,085である。同名については，①表記・読みともに同一，②表記は異なる／読みは同一，③読みは異なる／表記は同一，の3種があった。たとえば，森データのなかに「あおい」という女性名は「葵」4例，「碧」2例，「蒼」1例の計7例あった。これを7個と数えるのが「延べ語数」である。これを「葵（あおい）」「碧（あおい）」「蒼（あおい）」の3個と数えるのが①，「あおい」の1個と数えるのが②である。また，「彩花」という漢字名は「さやか」と読む場合と「あやか」と読む場合とがあるが，これが1例ずつだった場合，読みが異なるので2個と数えるのが②，表記が同じなので1個と数えるのが③の数え方である。①～③の方法で数えた語数を「異なり語数」と呼称する。表2に以上の「延べ語数」および「異なり語数」①～③の数を男女別に示す。

表2：2000・2001年生まれの人名データ（森データ）の延べ語数，異なり語数

	延べ 語数	異なり 語数①	異なり 語数②	異なり 語数③
男性名	817	662	353	653
女性名	1,085	846	389	819

注1：①表記・読みともに同一，②読みのみ同一，③表記のみ同一

## 2. 調査結果と分析

### 2.1. 拍数について(1) ——2000・2001年生まれの人名の男女差——

本節では拍数についてまとめる。また，拍数との関係で傾向・制限の見られる語音についても触れる。

表3・4は森データから拍数の割合を示したものである。表3は「延べ語数」，表4は「異なり語数②」の結果である。各表の左端「男性名・女性名」の右の数字は総数，各拍の枠内の左が出現度数，右が出現割合（小数点第2位を四捨五入）である。

表3：2000・2001年生まれの名前の拍数（森データ） 延べ語数

		2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
男性名	817	85 (10.4%)	502 (61.4%)	197 (24.1%)	26 (3.2%)	7 (0.9%)
女性名	1,085	382 (35.2%)	701 (64.6%)	2 (0.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

表4：2000・2001年生まれの名前の拍数（森データ） 異なり語数②

		2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
男性名	353	41 (11.6%)	180 (51.0%)	108 (30.6%)	19 (5.4%)	5 (1.4%)
女性名	389	113 (29.0%)	274 (70.4%)	2 (0.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

### 2.1.1. 男性名について

表3と表4の男性名における各拍数の出現割合について、2拍は述べ語数10.4%、異なり語数②11.6%でほぼ同程度、3拍は述べ語数61.4%、異なり語数②51.0%である。4拍・5拍については、述べ語数24.1%と3.2%、異なり語数②30.6%と5.4%である。6拍についてはともに1.0%前後で少ない。7拍以上の名はない。以上のことから、他の拍と比べ3拍には比較的同じ名が多くあったことが分かる。

### 2.1.2. 女性名について

表3と表4の女性名における各拍数の出現割合について、2拍は述べ語数35.2%、異なり語数②29.0%である。3拍は述べ語数64.6%、異なり語数②70.4%である。4拍は述べ語数および異なり語数②とも出現度数は2と僅少<sup>②</sup>で、5拍以上の名はない。

### 2.1.3. 拍数に見られる名前の男女差

表3・4に示された2000・2001年（平成12・13年）生まれの名前の拍数については、明確な男女差がある。すなわち、男性名では3拍の名が標準的であり、続いて4拍の名が多く、両者（3拍と4拍の名）を足すと述べ語数で85.5%、異なり語数②で81.6%となる。男性で3番目に多いのが2拍名で、述べ語数・異なり語数②とも10.0%台である。

これに対して女性名は、3拍名が最も多いことは男性名と共通するが、述べ語数64.6%、異なり語数②70.4%であり、男性名よりも3拍名の割合が高い。また、女性名では3拍の次に多いのは2拍名で、述べ語数35.2%、異なり語数②29.0%であり、男性の2拍名の3倍前後の割合である。

男性名で2番目に多かった4拍名は、女性名では2例しかなく、この点が男性名と大きく異なっている。5拍・6拍の名は男性のみに現れ、女性にはあらわれない。これも顕著な男女差の1つである。以上をまとめると、

- ・男性名の中心は2拍～4拍（3拍が最多）。5拍・6拍は僅少だが可。
- ・女性名の中心は2拍・3拍（3拍が最多）。4拍は僅少、5拍以上は不可。

となる。よって、2000・2001年（平成12・13年）生まれの名の拍数については、男性名のほうが多様性に富んでいる（＝多様な名が許容されている）と結論することができる。

## 2.2. 拍数について(2) ——1980年頃と2000・2001年生まれの名の比較——

### 2.2.1. 田籠（2005）の調査データについて

田籠(2005)は、人名の拍数、語頭音の特徴、語末音の特徴について検討している。田籠(2005)が依拠するデータは、ある国立大学(当時)における2002年度(平成14年度)の在籍学生(学部・大学院)データから、氏名のヨミ、男女の区別、日本人と留学生との区別の3項目を抽出したもので、年齢層は概ね18歳から24歳であるという。また、「命名者が両親だとすれば、現在の40代から50代の人々の命名意識が反映しているはずである」(pp.1-2)と推定している。2002年度(平成14年度)の在籍学生(学部・大学院)のデータ(以下、**田籠データ**と呼称する)であることから、田籠データが対象としているのは1980年前後に生まれた子どもの名前であると考えられる。田籠(2005)の推定のとおり命名者がその両親世代なら、2023年(令和5年)現在においては60・70代の人々の命名意識が反映されている、ということになる。田籠データの総数は、延べ語数が男性名3,475、女性名2,063で計5,538、異なり語数②が男性名736、女性名379で計1,115である。

およそ1980年(昭和55年)前後生まれの名を対象とする田籠データと、2000・2001年(平成12・13年)生まれの名を対象とする森データを比較することで、この20年間の変化を捉えることができる<sup>(3)</sup>。なお、田籠(2005)には異なり語数②の結果のみが示されている。よって、森データの表4と比較する。

表5：1980年前後生まれの名前の拍数(田籠データ) 異なり語数②

		2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
男性名	736	26 (3.5%)	254 (34.5%)	421 (57.2%)	22 (3.0%)	13 (1.8%)
女性名	379	81 (21.4%)	298 (78.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

(田籠(2005)の表1に示された数値をもとに作成)

## 2.2.2. 男性名について

表5と表4を見比べると、男性名は4拍の名が57.2%から30.6%に減少、3拍の名が34.5%から51.0%に増加している。つまり、1980年(昭和55年)頃に名付けられた男性名は4拍が最も多かったのに対し、2000・2001年(平成12・13年)生まれでは3拍名が最多となった。また2拍名は3.5%から11.6%と増加している。5拍・6拍の名前が男性名のみに見えるのは田籠データ・森データに共通する。

## 2.2.3. 女性名について

次に、女性名に着目すると、田籠データでは4拍以上の女性名が皆無だったのに対し、森データでは4拍の名が2件あった(注2参照)。また2拍の名は、田籠データでは全体の21.4%、森データでは29.0%であり、増えている。

## 2.3. 拍数と語音との関係

### 2.3.1. 5拍・6拍の男性名の前部要素の2拍目について

次に、2000・2001年(平成12・13年)生まれの5拍の男性名について、延べ26語(表3)のうち「一シロウ(士郎, 士朗)」3語、「一ノスケ(乃介, 之助)」10語、「一タロウ(太郎, 太朗)」13語、6拍の名前は7語すべて「一イチロウ(一郎, 一朗)」とつく名前だった。この点に関して、田籠(2005)は5拍・6拍の男性名の前部要素の2拍目について、母音イ・ウと撥音ンが現れやすいという音的特徴があると指摘している。森データにおける5拍・6拍の名前は以下のと

おり。

「一シロウ」 きょうしろう・けいしろう・こうしろう

「一ノスケ」 じょうのすけ・しんのすけ・じんのすけ・りゅうのすけ・りょうのすけ・りんのすけ

「一タロウ」 えいたろう・けいたろう・けんたろう・こうたろう・しょうたろう・じょうたろう・しんたろう・ゆうたろう・ようたろう・りゅうたろう

「一イチロウ」 けいいちろう・しょういちろう・しんいちろう・そういちろう・よういちろう

田籠データでは、5拍・6拍の男性名35語のうちイチタロウ、カッタロウなど6語の例外がみられたが、森データでは例外なく、田籠(2005)の指摘どおり、前部要素の2拍目の母音がイ・ウと撥音ンとなった。これは、前部要素の2拍が「1字漢字・2拍語」の音(オン)であるからだろう。沼本(2023)には漢字音の韻の部分について、中国語中古音、呉音、漢音の対照表が載るが(pp.25-49)、これを見ると、現代語で「1字漢字・2拍語」の漢字音の場合、2拍目はイ、ウ、ンがほとんどである。この傾向の反映であると解釈される<sup>(4)</sup>。

### 2.3.2. 2拍名の2拍目の音(語末音)について

表6と表7は、2拍名の2拍目の音(語末音)を一覧にしたものである。数字は述べ語数を示す。

表6：2拍名の2拍目の音(語末音)：男性名

1980年頃	イ5, ウ8, オ2, ク4, ル1, ン6 → 26語
2000・2001年	カイ(海)5, ショウ(翔)9, レオ(玲央)2, リキ(力)1, リク(陸)4, タツ(辰)2, シュナ(珠成)2, ソラ(空良)2, ルリ(瑠璃)1, メル(明瑠)1, マロ(磨)1, サラ(瑳和)1, ジン(仁)7 → 38語

注1：2000・2001年の名は各1例ずつ示す  
(田籠(2005)の本文および森データより作成)

表7：2拍名の2拍目の音(語末音)：女性名

1980年頃	ア1, イ4, ウ2, エ5, オ4, カ5, キ5, ク1, コ1, サ3, ズ1, チ1, ナ8, ノ1, ホ6, マ2, ミ13, メ1, モ2, ヤ3, ユ1, ヨ2, ラ1, リ6, ワ1, ン1 → 81語
2000・2001年	ノア(乃愛)3, マイ(麻衣)6, ミウ(美羽)3, サエ(紗栄)5, マオ(真緒)6, ユカ(由佳)6, サキ(咲希)4, ミク(未来)1, メグ(めぐ)1, リコ(莉子)5, ミサ(未沙)4, チズ(千寿)2, サチ(彩稚)1, ナツ(奈津)1, オト(音)1, ナナ(菜奈)13, ネネ(音々)2, リノ(梨乃)4, カホ(果穂)9, ユマ(由真)3, マミ(麻未)6, ユズ(結芽)1, モモ(もも)2, アヤ(彩)2, ムユ(真由)3, イヨ(威世)2, サラ(沙羅)2, ユリ(由梨)6, ナル(南瑠)2, ミレ(みれ)1, ミワ(美和)2, リン(凛)4 → 113語

注1：2000・2001年の名は各1例ずつ示す  
(田籠(2005)の本文及び森データより作成)

2拍名の2拍目の音(語末音)について、1980年(昭和55年)頃の命名では、男性名は母音イ・ウ・オ、撥音ン、子音ク・ルの計6種の音に限られている(表6)。これに対し、女性名は母音5種、カ〜ワ行全ての清音の行でひとつ以上の語例が見られる(表7)。語数も男性名26語に対し、女性名は81語で、女性の2拍名は多様である。

男性の場合、2000・2001年（平成12・13年）の命名では、2拍名の2拍目の音（語末音）が母音であるとき、1980年（昭和55年）頃の命名と同様にその音はイ・ウ・オの3種のいずれかである。他方、その音が子音（撥音を含む）である場合、1980年（昭和55年）頃はク・ル・ンのいずれかであるのに対し、キ・ク・ツ・ナ・ラ・リ・ル・ロ・ワ・ンの10種に増えている。

女性の場合は、1980年（昭和55年）頃と同様に2000・2001年（平成12・13年）の命名においても、2拍名の2拍目の音（語末音）には母音5種全てが現れている。子音（撥音を含む）については、1980年（昭和55年）頃にはカ・キ・ク・コ・サ・ズ・チ・ナ・ノ・ホ・マ・ミ・メ・モ・ヤ・ユ・ヨ・ラ・リ・ワ・ンの21種であったのに対し、2000・2001年（平成12・13年）の命名ではカ・サ・ク・グ・コ・サ・ズ・チ・ツ・ト・ナ・ネ・ノ・ホ・マ・ミ・メ・モ・ヤ・ユ・ヨ・ラ・リ・ル・レ・ワ・ンの27種に増えている。

表4と表5の比較から男女とも2拍名が増えていること、また表6と表7から男女ともに2拍名の種類が豊富になっていることが分かる。ただし、2拍名の2拍目の音（語末音）がア・エの場合、それが1980年（昭和55年）頃の命名であっても2000・2001年（平成12・13年）の命名であっても、それは女性名であることに変わりはない。

### 3. 2拍の女性名の歴史的推移 ——江戸時代から平成時代まで——

女性名の拍数については、田籠（2005）以前にも多くの研究がある。以下では、寿岳・樺島（1958）、満田（1961）、岩淵・柴田（1964）、田原（1991）を取り扱う。これらは対象とする時代が異なっている（一部は重なる）。各研究<sup>5)</sup>が対象とする女性名を時代順に紹介することで、2拍の女性名の歴史的推移について整理する<sup>6)</sup>。

#### 3.1. 1695年（元禄8年）の2拍の女性名 ——岩淵・柴田（1964）より——

岩淵・柴田（1964）は1695年（元禄8年）の女性名について報告する<sup>7)</sup>。これに拠れば、名の分かる1,471名の女性名うち、1,398名が2拍の名で、これは全体の95.0%に相当する。

#### 3.2. 1837年（天保8年）から1865年（慶応元年）の2拍の女性名

##### ——寿岳・樺島（1958）より——

寿岳・樺島（1958）が対象とするのは、1837年（天保8年）から1865年（慶応元年）の女性名である。現在の京都府亀岡市馬路町にあたる旧亀岡町馬路村の宗門人別帳の調査に基づく。1837年（天保8年）、1846年（弘化3年）、1854年（嘉永7年）、1865年（慶応元年）の4年分に現れる全ての女性、延べ2,942名を対象とする。このうち2拍の名は92.7%<sup>8)</sup>である（p.26）。また、具体名として「うの、はる、むめ、うた、まつ、ぬい、なを、とめ、くま、ちよ、かめ、とみ、しけ、すて、いと、つる、とき、まさ、いそ」などがあり、以上の19語で全体の25%以上を占める（p.26）。

#### 3.3. 1900年（明治33年）から1984年（昭和59年）の2拍の女性名

##### ——満田（1961）、田原（1991）より——

満田（1961）は杉並第一小学校（東京）の卒業生と在校生の名簿を調査している。対象は1900年（明治33年）～1954年（昭和29年）生まれの女性名である。なお、2拍名の割合は示されていないが、実数は書かれていない。

田原（1991）はデータの情報源について、「東京のある個人病院のカルテを使わせてもらった。1984年来院分の1年間のカルテから、名字の「あ行」から「た行」までの人を対象とした」（p.42）と説明している。対象とするのは1900年（明治33年）～1984年（昭和59年）生まれの1,489人の女性名である。2拍名の実数・割合とも明示されていないが、原論文の図4（p.45）からおおよその割合が知られる。

### 3.4. 総合的考察

以上、3.1～3.3に挙げた調査結果および表3の2拍名の結果を1つの表にまとめて示す（表8）。ただし、田原（1991）の調査結果のうち、満田（1961）と重なる1900年（明治33年）～1949年（昭和24年）のデータは割愛した。図1は表8をグラフ化したものである。

表8：1695年～2001年における2拍の女性名の推移

1695	1837-65	1900-04	1905-09	1910-14	1915-19	1920-24	1925-29	1930-34
95.0	92.7	90.8	77.4	45.2	27.4	11.8	7.4	3.8
1935-39	1940-44	1945-49	1950-54	1950-59	1960-69	1970-79	1980-84	2000-01
1.2	1.4	2.2	4.3	5.0*	7.5*	23.0*	32.0*	35.2

注1：上段は西暦，下段は2拍名の割合

注2：\*印のある1950-59，1960-69，1970-79，1980-84の数値は目安  
（岩淵・柴田（1964），寿岳・樺島（1958），満田（1961），田原（1991），表3より作成）

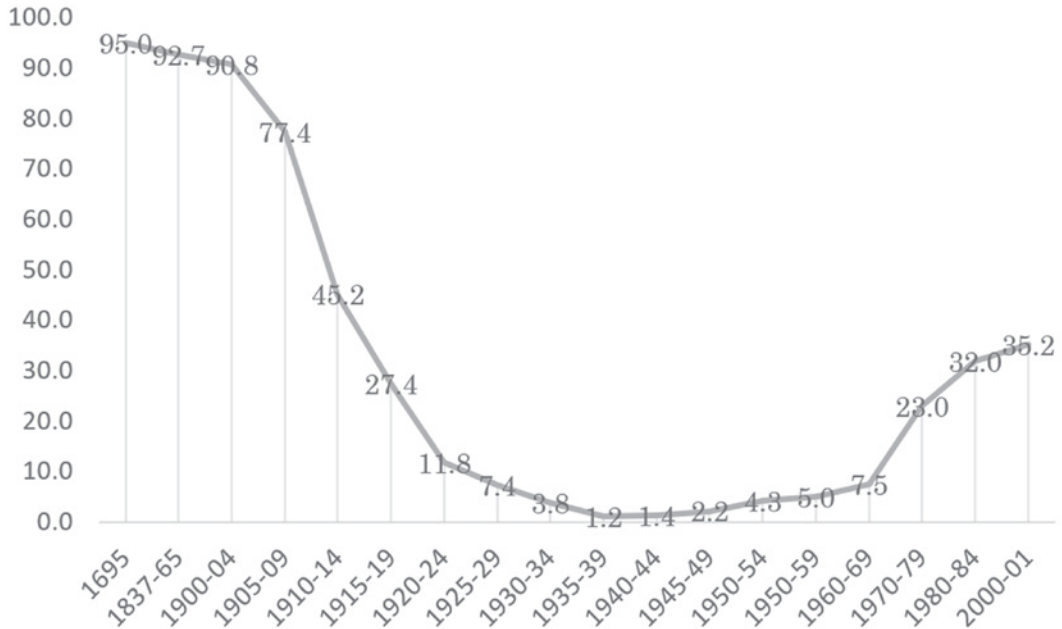


図1：1695年～2001年における2拍の女性名の推移

表8および図1のとおり，2拍の女性名は，江戸時代を通じて9割を超え，その傾向は1904年（明治37年）頃まで継続する。その後は急激に減り，1935年（昭和10年）～1944年（昭和19年）に底を打つ。その後，微増傾向が続き，1960年（昭和35年）以降，急激に伸びる<sup>9)</sup>。



以上の推移をたどった理由については、岩淵・柴田（1964）の次の言及が正鵠を得ていよう。「明治時代に流行した2拍の名前が、その後、菊子・好子・千代子のような「子」のつく名前——それは多く3拍——に圧倒されて少なくなったのが、昭和の終戦後、美恵（ミエ）・恵美（エミ）・由美（ユミ）・美奈（ミナ）といった、万葉仮名風に使う漢字2字の2拍名が多くなって、ふたたび2拍の名前が多くなろうとしている」（p.37）<sup>90</sup>。

明治期までの2拍名と終戦以後の2拍名の質的差異については、複数の指摘がある。戦後に増えた2拍名について、満田（1961）は明治の頃のそれと比較して「これは全く異質の、ヌーベル・バーグ的な名前（マリ、ユリなど）」（p.46）とし、馬瀬（1963）は「「里香」「美香」「理恵」といったハイカラな感じのする2音節の名前」（p.75）と記している。

先に「2000・2001年（平成12・13年）生まれの女性名における2拍名の割合が1980年（昭和55年）頃のそれと比較して増加したこと」を確認した（2.2）。この約20年間における2拍名の増加について、戦後の「ヌーベル・バーグ的」で「ハイカラな感じ」の2拍名が、その後も増加を続けて平成に至ったものと判断される。

## 4. 平成時代・令和時代における2拍名

### 4.1. 2000・2001年生まれの2拍の男性名

前記のとおり、2拍の男性名は1980年（昭和55年）頃生まれでは3.5%、2000・2001年（平成12・13年）生まれでは10.9%であり、増加した（2.2）。ここでは、森データから2拍の男性名すべてを抽出し、一覧化する。名は1字漢字名→2字漢字名の順に、それぞれ50音順に並べる。総数は延べ語数85（表3）、異なり語数②41（表4）である。表内の数字は延べ語数を示す。

表9：2000・2001年生まれの2拍の全男性名（森データ）

<p>▼1字漢字名（延べ語数66, 異なり語数②27）</p> <p>海（カイ）1, 開（カイ）1, 岳（ガク）1, 楽（ガク）1, 暁（ギョウ）1, 慶（ケイ）1, 建（ケン）1, 港（コウ）1, 阜（コウ）1, 宗（シュウ）1, 嵩（シュウ）1, 終（シュウ）1, 峻（シュン）1, 駿（シュン）1, 淳（ジュン）1, 潤（ジュン）1, 祥（ショウ）1, 翔（ショウ）5, 丈（ジョウ）1, 新（シン）1, 仁（ジン）2, 臣（ジン）1, 静（セイ）1, 創（ソウ）1, 壯（ソウ）1, 奏（ソウ）1, 想（ソウ）2, 颯（ソウ）1, 空（ソラ）1, 拓（タク）1, 辰（タツ）1, 磨（マロ）1, 優（ユウ）1, 力（リキ）2, 陸（リク）3, 龍（リュウ）1, 涼（リョウ）2, 稜（リョウ）1, 綾（リョウ）1, 凌（リョウ）2, 諒（リョウ）1, 遼（リョウ）1, 峻（リョウ）1, 嶺（リン）1, 嶺（レイ）1, 伶（レイ）1, 玲（レイ）1, 廉（レン）1, 蓮（レン）7</p> <p>▼2字漢字名（延べ語数19, 異なり語数②14）</p> <p>璿和（サワ）1, 珠成（シュナ）1, 珠羅（シュラ）1, 純音（ジュン）1, 聖那（セナ）1, 空良（ソラ）1, 宙大（ソラ）1, 宙弥（ソラ）1, 夢来（ムク）1, 明瑠（メル）1, 陸央（リオ）1, 大陸（リク）1, 立都（リツ）1, 瑠威（ルイ）1, 瑠璃（ルリ）1, 伶央（レオ）1, 玲央（レオ）1, 玲音（レオ）1, 玲士（レオ）1</p>
--

表9を見ると、2拍の男性名について、1字漢字名より2字漢字名のほうが新しい傾向の名であると感じられる。それは、1字漢字名のほうは各漢字の音読みを基調としてそのまま読めるものがほとんどであるのに対し、2字漢字名のほうは読みかたが複雑になっているからであろう。名に用いられる漢字の読みについては、近年、笹原（2023a, 2023b）、岡島（2023）などの研究が相次いで出されている。「1字漢字名より2字漢字名のほうが新しい傾向の名であると感じられる」ことについては、これらの新しい研究成果を踏まえ、また、新たな資料を得たのちに改め

て検討されるべきである。

#### 4.2. 令和時代の2拍名

本項では、令和改元以降の2拍名について検討する。データの偏り（後述）を廃するためには、ウンサーシュッツ（2017）のように、全国の市町村の広報誌を情報源とする方法が考えられるが、それは別稿に譲り、ここでは明治安田生命保険相互会社およびマタニティ用品およびベビー用品の専門店である株式会社赤ちゃん本舗<sup>(11)</sup>がそれぞれ発表している名前ランキングを用いて簡単な検討を加える。

##### 4.2.1. 調査の概要

明治安田生命による調査は1989年（平成元年）に初回が実施され、2022年（令和4年）で34回目を迎えた。明治安田生命のHP<sup>(12)</sup>に拠れば、2022年（令和4年）のランキングの調査概要は次のとおり。

1. 調査対象：明治安田生命の個人保険・個人年金保険の既契約情報（2022年9月時点）
2. 調査数：個人保険・個人年金保険の保有契約のうち  
2022年生まれの男の子8,952人、女の子8,561人<sup>(13)</sup>
3. 調査時期：2022年11月

赤ちゃん本舗による調査は2005年（平成17年）に開始された（同社HP<sup>(14)</sup>）。2023年（令和5年）のランキングの調査概要は次のとおり（同社HP<sup>(15)</sup>）。

1. 調査対象：赤ちゃん本舗の会員情報のうち、生年月日が2023年1月1日～2023年9月1日の子ども
2. 調査人数：8,766人（男の子4,238人、女の子4,528人）<sup>(16)</sup>
3. 調査時期：記載なし<sup>(17)</sup>

データの偏りについて、注<sup>(13)</sup>および<sup>(16)</sup>に記したことに加え、両調査に共通する問題点として、10月から12月の子どもの名前が対象から外されていることが挙げられる。季節にちなんだ名づけ（例えば春・夏に生まれた子どもに「はる」「なつ」と付けることなど）は伝統的に行われてきた（寿岳・樺島（1958：28））。両調査では、10月から12月、すなわち晩秋から初冬の季節にちなんだ名前が排除されてしまっている。

以上のようなうらみがあることを弁えつつ、追試・検証が可能な広く公開された近年のデータであるという点を重くみて、両調査の結果について検討する。

##### 4.2.2. 調査結果

赤ちゃん本舗は2021年（令和3年）から読み方のランキングを公表している。2021年（令和3年）は上位20位まで、2022・2023年（令和4・5年）は上位30位までである。明治安田生命は、以前より読み方のランキングを公表していたが、2023年（令和5年）年10月31日現在、過去のデータはHP上に見当たらない。そこで、現在アクセスできる2022年（令和4年）の上位50位のみ取り上げることとする。

以上4つのランキングにおける2拍語の割合は表10～表13のとおりである。

表10：2021年生まれの名前の拍数：人気上位20位

上位20位	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
男性名	3 (15.0%)	16 (80.0%)	1 (5.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
女性名	8 (40.0%)	12 (60.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

(赤ちゃん本舗のHP<sup>®</sup>より作成)

表11：2022年生まれの名前の拍数：人気上位30位

上位30位	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
男性名	7 (23.3%)	21 (70.0%)	2 (6.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
女性名	14 (46.7%)	16 (53.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

(赤ちゃん本舗のHP<sup>®</sup>より作成)

表12：2023年生まれの名前の拍数：人気上位30位

上位30位	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
男性名	8 (26.7%)	19 (63.3%)	2 (6.7%)	1 (3.3%)	0 (0.0%)
女性名	10 (33.3%)	20 (66.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

(赤ちゃん本舗のHP<sup>®</sup>より作成)

表13：2022年生まれの名前の拍数：人気上位50位

上位50位	2拍	3拍	4拍	5拍	6拍
男性名	16 (32.0%)	32 (64.0%)	2 (4.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
女性名	26 (51.0%)	25 (49.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

(明治安田生命のHP<sup>®</sup>より作成)

#### 4.2.3. 考察

##### ○男性名について

男性名については、年を経るごとに2拍名の人気が高まっている。直近3年の経過を知ることのできる赤ちゃん本舗のランキングにおいて、2拍名の割合は、

2021年（令和3年）15.0% < 2022年（令和4年）23.3% < 2023年（令和5年）26.7%

と増加を続けている。他方、明治安田生命の調査（2022年（令和4年生まれ）対象）では、人気上位50位の名前の32.0%を2拍の名が占めている。

調査・集計の方法がまったく異なるため、表10～表13と表3～表5を比較することには慎重でなければならないが、「1980年（昭和55年）頃以降、2拍の男性名がその人気を高め続けている」と推論することは許されるだろう。

ところで、田籠データ（1980年（昭和55年）頃生まれ）と森データ（2000・2001（平成12・13年）年生まれ）において、2拍名の2拍目の音（語末音）がア・エである場合、それはすべて女性名であった（2.3.2）。しかし、明治安田生命による2022年（令和4年）生まれの男性名ランキングの第26位に「とあ」がランクインしている。これは、これまで見られなかった新傾向の名であると言える。

## ○女性名について

女性名については、男性名とはやや異なり、「2拍名は一貫して人気がある」と捉えることができる。赤ちゃん本舗のランキングでは、

2021年（令和3年）40.0% < 2022年（令和4年）46.7% < 2023年（令和5年）33.3%

となっており、2022（令和4年）から2023年（令和5年）にかけて減っているものの、高水準であることに変わりはない。さらに、明治安田生命の調査（2022年（令和4年）生まれ）対象では、人気上位50位の名前の過半数を2拍名が占める。女性の2拍名について、「3. 2拍の女性名の歴史的推移」の章で「1935年（昭和10年）～1944年（昭和19年）に底を打つ。その後、微増傾向が続き、1960年（昭和35年）以降、急激に伸びる」と記したが、1960年（昭和35年）以降の急激な増加傾向は平成・令和の時代を通じて継続、あるいは高次安定していると推察される。

## 5. おわりに ——本論文の成果と今後の課題——

### 5.1. 本論文の成果

#### 5.1.1. 田籠データと森データとの比較から

本論文では、2000・2001年（平成12・13年）生まれの人名について新たに調査・整理し（森データ）、1980年（昭和55年）頃生まれの人名について考察した田籠（2005）と比較し、次のことを明らかにした。

- ・男性名では、1980年（昭和55年）頃は4拍が最多、2000・2001年（平成12・13年）は3拍が最多。つまり、最も一般的な男性名の拍数が変化した（人気に移った）（2.2.2）。
- ・女性の2拍名は、1980年（昭和55年）頃は21.4%、2000・2001年（平成12・13年）は29.0%であり、増加した（2.2.3）。
- ・2拍名の2拍目の音（語末音）には男女差がある。男女とも1980年（昭和55年）頃に比べ2000・2001年（平成12・13年）の2拍名の語末音はその種類が増えたけれども、その音がア・エである場合、それは女性名である（2.3.2）。

#### 5.1.2. 女性名に関する複数の先行研究との対照から

女性名に関する複数の先行研究との対照から、田籠（2005）と森データの比較から明らかになった女性の2拍名の増加について、江戸時代から続く女性名の歴史的推移の中に位置づけることができた（3）。

#### 5.1.3. 明治安田生命・赤ちゃん本舗の名前ランキングから

インターネット上に公開されている2つの名前ランキングから、令和時代における命名の傾向を考察し、次のことを推定した。

- ・1980年（昭和55年）頃以降、2拍の男性名がその人気を高め続けている。
- ・1960年（昭和35年）以降の2拍の女性名の急激な増加傾向は平成・令和の時代を通じて継続、あるいは高次安定している。

他方、2022年（令和4年）生まれの男性名のランキングに、2拍名の2拍目の音（語末音）に「あ」が現れた。これは新傾向の名であると言える。

## 5.2. 今後の課題

柴田 (1955) が新たに開拓した量的方法による名 (first name) の日本語学的な研究は、その後、限られた研究者によって細々と、また散発的に続けられてきた状況にあり、十分な蓄積がなされたとは言いがたい。個人情報保護、それに伴う研究倫理の問題等があり、データの収集、公開が難しく、したがって、研究が進展しなかったものと思われる。しかし、ウンサーシュッツ (2017) の方法 (全国の市町村の広報誌を情報源とする方法) は、この状況を打破しうる。この方法による調査研究の実践により、注3に記した地域差・学歴差等の「名 (first name) の位相差」の解明が進むはずである。また、5.1.3において「推定」されたとした点も、検証可能である。

紙幅の都合上、本論文では触れられなかった名の文字数および漢字・かな・カナ表記の歴史の変遷、また、近年、笹原宏之氏らが精力的にその成果を発表している名の漢字の読み方の問題 (笹原 (2023a, 2023b) など)、川原繁人氏が唱道する名の音象徴 (川原 (2015, 2017) など) の分析、特にその歴史の変遷についても、ウンサーシュッツ (2017) の方法により新たなデータを得、検証することで、多くのことが実証的に明らかにできるであろう。より多くの研究者が名 (first name) の実証的な研究に参画し、この分野が成熟してゆくことを期待したい。

## 註

- (1) 浪人や留年などがあった場合、誕生年月は2000年 (平成12年) 4月から2001年 (平成13年) 3月のあいだにはならない。ただし、その数は皆無または僅少と考え、本研究ではそれを逐一確認することはせず、卒業アルバム記載の全員が上記の年月に生まれた人であると仮定した。
- (2) 桜子 (さくらこ)、聖蘭 (せいらん) の2例。
- (3) ただし、両データの質的な差について、注意が必要である。すなわち、田籠データが「ある国立大学」 (田籠2005: 1) の在学学生を対象にしているのに対し (明記されていないが、田籠氏の本務校であった島根大学の在学学生であると推測される)、森データは、1.3に記載のとおり、広島市および (広島市の西側に隣接する) 廿日市市の中学校・高等学校の卒業アルバムに依拠して収集されている。つまり、両データには地域差と学歴差がある。

名 (first name) の地域差については、寿岳・樺島 (1958) が明治時代の女性名の変化について東京・京都・滋賀・兵庫の4地域を比較して検討している。4地域のうち、東京・京都・滋賀のデータは高等女学校の生徒、兵庫は小学校の生徒の名を対象とする。寿岳・樺島 (1958) は東京・京都を「都会」 (p.20) と記し、滋賀のデータの収集元である日野高等女学校と日野町について「日野高女の存在する日野町は (中略)、近江商人の発祥地の一つであって、それだけに将来への発展性は少ないと言われる。商業形態は店制度をとり、関東・北海道・京阪神に主として酒・醤油・薬 (売薬) 等の店を持つ、大がかりな出稼ぎである。出身地に各地の経済力に応じた家を持ち、妻子はそこにおく。店員の妻子もその周辺に住み、「お出入」と称して仕えるという極めて封建的な環境である由。従て日野高女もそういう風潮に役立つ女を作るための教育機関という性格が色濃く、作法技芸中心の花嫁学校として滋賀県でも有数であった。その点京都や東京と対照的な性格を持つ」 (pp.20-21) と説明する。また、兵庫については、「兵庫のデータにとった旧兵庫県美囊郡上淡河村 (中略) は (中略) 六甲山系と丹波山岳地帯との間にはさまる農山村である。神戸市に近いわりに交通不便で、

そのせいか村の性格もかなり封建的、保守的である。(中略)結婚は他村の女とすることが多い。以上のようなわけで、この村は典型的でないなかである」(p.21)と記す。

そして、上記の東京・京都・滋賀・兵庫の4地域を対象とするデータに基づき、「変化は明治30年代にまず始まったようである。漢字の採用の増加が早く始まり、〇〇コの増加がややおくれて始まった。/地方別にみると、漢字名の採用は東京と京都には大差なく、滋賀はややおくれ、兵庫はそれより更におくれる。〇〇コの採用についてみると、東京は京都にややおくれて始まったがすぐ追いついている。滋賀兵庫はやはりおけている。」(p.21)と記す(/は引用元の文献における改行を示す。また、引用にあたり旧字体は新字体に改めた。以下同様)。そして、「東京・京都・滋賀・兵庫の調査対象は地域、家庭の社会的階層、父兄の教養など諸条件がからみ合っているが、《都会ほど漢字名、〇〇子の採用が早く行われた》ことが言える」(p.22)とまとめている。なお、寿岳・樺島(1958)では、このことについてさらに詳細な分析を試みているが、ここでは省く。

以上の記述をふまえて改めて田籠データと森データを見直すと、両データに地域差や家庭の社会的階層、保護者の教養等が影響を及ぼしている可能性は排除できない。他方で、寿岳・樺島(1958)がテレビ・ラジオのなかった頃のデータを対象としているのに対して、田籠データ(1980年(昭和55年)前後生まれの名)はテレビが完全に普及したあと、森データ(2000・2001年(平成12・13年)生まれ名)はインターネットの普及が進んできた頃の名が対象となっている。よって、明治の頃のような名の地域差(その他の社会的な位相差を含む)は、なくなってきたのではないかと考えられる。

この問題は興味深い研究課題であるが、紙幅の都合上、これ以上立ち入らない。また、田籠データと森データの比較においても、地域差・学歴差については考慮しない。

なお、ウンサーシュッツ(2017)は全国の市町村の広報誌を情報源とする方法により、特定地域に偏らないデータの収集とその分析を実践している。地域差についても検討しており、参考になる。

- (4) 坂水貴司氏(広島経済大学)の教示による。
- (5) これらの諸研究においては、延べ語数で数えていると判断される。
- (6) 女性名の通史については、歴史学者・角田文衛によって編まれた『日本の女性名：歴史的展望』(新版、国書刊行会、2006)がある。全635頁。古代から近代後期(昭和後半)までの女性名を広く取り上げるが、主眼は近世期(江戸時代)以前に置かれており、明治以降の記述は少ない。
- (7) 『世田谷区史料第3集』に拠る。柴田(1961)はこの史料について次のように解説している。「女の名は、過去帳などを見ても、妻とか母とか女とか書いてあるだけで、具体的な名はなかなか知ることができない。ところが(中略)『世田谷区史料第3集』(中略)を見ると、1,471人も女の名を知ることができる。/元禄8年(1695年)、彦根藩の4代藩主直興が近江に弁天堂を建てるときに、領内のすべての人、士農工商、貴賤貧富、僧侶を問わず、生まれたばかりの赤んぼから老人に至るまで、計26万人から1人1文ずつの奉加金を募った。その寄進帳が井伊家に残っていて、そのうち世田谷領(いまの世田谷区野毛・用賀・大蔵・弦巻・世田谷といったところ)の分が、この『世田谷区史料第3集』に集録されている。/妻と母は、そこでもやはり、妻、母とだけ書いてあって、名は出ていないが、そのほかの娘とか下女とかの名は全部出ている。全住民6,227人のうち、1,471人が具体的な名がわかる女で

ある。」(p.60. 引用にあたり漢数字は算用数字に改めた)

- (8) 2拍名の実数は書かれていない。
- (9) 馬瀬(1963)は、長野市の小学校、中学校、幼稚園および長野県立短期大学の名簿を利用し、1920年(大正9年)～1962(昭和37年)生まれの女性名における2拍名の割合を報告している。その調査結果は表8・図1と同じ傾向を示す。

他方、本文において江戸時代後期の調査結果を取り上げた寿岳・樺島(1958)は、明治時代から昭和時代における女性名についても報告している。対象とするのは京都府立第一高等女学校の卒業生であるが、その調査結果は、表8・図1とはかなり異なっている。寿岳・樺島(1958)の調査結果について、表8において年代的に対応する部分を抽出して示す。

表14：1877年～1944年における2拍の女性名の推移

—	1877-86	1887-96	1897-1906		1907-1916		1917-1926		1927-1936		1937-1941	—
—	72.0	62.0	63.0		47.0		36.0		24.0		17.0	—
1837-65	—	—	1900-04	1905-09	1910-14	1915-19	1920-24	1925-29	1930-34	1935-39	1940-44	
92.7	—	—	90.8	77.4	45.2	27.4	11.8	7.4	3.8	1.2	1.4	

(上段は寿岳・樺島(1958：18)の第一表より、下段は表8より作成)

下段では、江戸時代から1904年(明治37年)まで、2拍名が90%を超えているに対し、上段では明治時代初期より72.0%→62.0%と2拍名の減少が著しい。明治時代末期の1910年(明治43年)年頃では、両者ともおよそ45%超の割合で一致するが、その後、上段ではその割合が漸減していくのに対し、下段では急激に減少し、1925年(大正14年)以降は10%を下回っている。

なぜこのような差が見られるのか、現時点では判然としない。1つの可能性としては、寿岳・樺島(1958)が調査対象とする京都府立第一高等女学校について「京都府立第一高女は明治10年から卒業生を送っている非常に古い学校であり、敗戦後の学制改革に至るまで、さまざまな面でのトップ・クラス(もちろんきわめて常識的な意味での)を称していた。こういう学校だから京都全体の一般的傾向を示すものではないが、都会の先進的傾向を示していると考えられる」(p.17)と説明しているあたりに、その理由を求められるかもしれない。注(3)に記したことと合わせて、今後の課題としたい。

- (10) 1904年(明治37年)以降の2拍名減少の要因とされる「子」のつく名前の隆盛については、橋本・井藤(2011)において詳細に分析されている。
- (11) 実店舗におけるブランド名はカタカナ表記の「アカチャンホンポ」。本稿では正式な会社名を採用して「赤ちゃん本舗」と記載する。
- (12) 「調査要領」<https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/result.html>
- (13) サンプル数については一見すると十分な数とも思われるが、このランキングについては、やはり、データに偏りがあることに留意しなければならない。すなわち、生誕後すぐ(1年以内)個人保険・個人年金保険に加入する(加入できる)世帯というのは、日本語による名づけを行う母集団の全体を代表していないのではないかと。たとえば、経済的にはある程度のハイクラスであり、物の見方・考え方は慎重、また長期的視野で物事を考え、判断する人々が多い、というような可能性がある(検証が必要)。注(3)では、名づけの地域差と学歴差の問題について触れているが、経済差や(物の見方・考え方などの)個人差についても、検討

すべきだろう。

- (14) 「歴代の赤ちゃん名前ランキング／平成から令和に見る出来事と赤ちゃんの名前」  
<https://www.akachan.jp/maternity/ranking/heiseireiwa/#:~:text=2005%E5%B9%B4%EF%BC%88%E5%B9%B3%E6%88%9017%E5%B9%B4%EF%BC%89>
- (15) 「2023年赤ちゃん命名・名前ランキング（令和5年度）」  
<https://www.akachan.jp/maternity/ranking/>
- (16) マタニティ用品とベビー用品は妊娠・出産をすればどの家庭でも必要になる。それらの商品の専門店である赤ちゃん本舗の「会員」は、明治安田生命の「個人保険・個人年金保険の既契約」者よりも、広く多様な人々が含まれていよう。明治安田生命の調査結果については、経済差や個人差について留意が必要な旨を上記したが、赤ちゃん本舗の調査結果については、それらを気にする必要は少ないはずだ。ただし、赤ちゃん本舗の「会員」についても、実店舗が身近にある人が多い可能性があり、実店舗が広く展開している都市部の子どもの名前に偏っているかもしれない。
- (17) 詳細は不明だが、調査対象期間および調査結果発表時期から、2023年9月～10月頃と判断される。
- (18) 「赤ちゃんお名前ランキング2021年」<https://www.akachan.jp/maternity/ranking/2021/>
- (19) 「2022年赤ちゃん命名・名前ランキング（令和4年度）」  
<https://www.akachan.jp/maternity/ranking/2022/>
- (20) 注(15)と同じページ。
- (21) 「読み方ベスト50」[https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/read\\_best50/](https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/read_best50/)

## 引用文献

- 岩淵悦太郎・柴田武（1964）『名づけ』筑摩書房。
- ウンサーシュッツ・ジャンカーラ（2017）「日本の名付け習慣における変遷の全国的分布」『立正大学心理学研究所紀要』15, pp.67-78.
- 岡島昭浩（2023）「人名に使われる漢字の用法の変化について：1字1音（1字1拍）の読みを中心に」『語文』121, pp.42-57.
- 川原繁人（2015）『音とことばのふしぎな世界：メイド声から英語の達人まで』岩波書店, pp.5-20.
- 川原繁人（2017）『「あ」は「い」より大きい!?: 音象徴で学ぶ音声学入門』ひつじ書房, pp.31-44.
- 笹原宏之（2023a）「日本における命名文化とその読み仮名：「愛」を中心に」『日本語学』42(2), pp.128-140.
- 笹原宏之（2023b）「漢字で表記される日本の人名の読み方に関する諸問題」第135回NINJALコロキウム「配布」用資料, 2023年9月12日開催.
- 柴田武（1955）「日本の人名」中村通夫編『講座 日本語 第2巻 日本語の構造』大月書店, pp.125-145.
- 柴田武（1961）「250年前の女の名」『言語生活』118, pp.60-61.
- 寿岳章子（1958）「女のなまえ：ある村でのななし」『言語生活』76, pp.39-45.



- 寿岳章子・樺島忠夫（1958）「女のなまえ」『計量国語学』7, pp.17-31.
- 田籠博（2005）「人名の語頭音と語末音」『島大言語文化：島根大学法文学部紀要．言語文化学科編』18, pp.1-26.
- 田原広史（1991）「人名」『日本語学』10(6), pp.42-50.
- 角田文衛（2006）『日本の女性名：歴史的展望』新版，国書刊行会.
- 東京都世田谷区編（1960）『世田谷区史料第3集』東京都世田谷区（国立国会図書館デジタルコレクションに所収）.
- 沼本克明（2023）『日本漢字音の歴史 新装版』東京堂出版.
- 橋本淳治・井藤伸比古（2011）『「子」のつく名前の誕生』仮説社.
- 馬瀬良雄（1963）「長女の名まえを決めるまで」『言語生活』138, p.74-79.
- 満田新一郎（1961）「多い苗字，多い名前」『言語生活』118, pp.42-46.

#### 引用ウェブページ \*最終閲覧日：2023年（令和5年）10月31日

- 赤ちゃん本舗（2021）「赤ちゃんお名前ランキング2021年」（URLは注(18)参照）
- 赤ちゃん本舗（2022）「2022年赤ちゃん命名・名前ランキング（令和4年度）」（URLは注(19)参照）
- 赤ちゃん本舗（2022）「歴代の赤ちゃん名前ランキング／平成から令和に見る出来事と赤ちゃんの名前」（URLは注(14)参照）
- 赤ちゃん本舗（2023）「2023年赤ちゃん命名・名前ランキング（令和5年度）」（URLは注(15)参照）
- 明治安田生命（不明）「調査要領」（URLは注(12)参照）
- 明治安田生命（不明）「読み方ベスト50」（URLは注(21)参照）

**付記** 本論文は，第2著者の森が2023年（令和5年）1月に県立広島大学に提出した卒業論文『日本語における男性名・女性名の特徴について：拍数，文字数，音，漢字に注目して』に基づく。本論文の中核となる「森データ」の収集と整理は，森が担った。他方，本論文における考察部分のほとんどは，森の卒業後，第1著者の小川が新たに書き下ろした。なお，この研究は，JSPS科研費JP22K00574「南米ボリビアの日本人移住地における〈子どもの名づけ〉に関する社会言語学的研究」（研究代表者：小川俊輔）による成果の一部である。

